

1960年代初期のトルコの村の生活

伊佐治 大陸（名古屋女子大学）

1. 本研究の趣旨と内容

アジアの西端に位置する開発途上国トルコは、1960年代以降、人口増加問題を抱えている。近代化、工業化を模索し展開するトルコ共和国にとって、人口増加率の抑制は大きな課題の一つである。人口増加問題はその国の教育システムの普及・発展と密接な関わりを有するため、トルコ共和国が果たしていかなる教育システムの国であるかをめぐって研究を進めてきた。

これまでにトルコの母子保健、人口教育、女子教育、高等教育システムに注目し、その歴史、現状、課題について若干のまとめを行ってきた。今回は1960年代初期のトルコの村の生活に焦点を当て、その典型事例として、中部アナトリアの一村落デミルジレール（Demirciler）の実態についてまとめを試みる。

近代化、工業化をめざす現在のトルコは、総人口6380万人（『世界人口白書』1998年より）のうち69%が都市部に生活し、地方の田舎には最早31%しか生活しない現実がある。しかし、かつてトルコは圧倒的に農村人口の多い社会であった。都市社会化する現在のトルコがその背景に持つ「故郷^{ふるさと}としてのアナトリアの村」の実態を把握することは、今日のトルコの社会と人々及び人口問題をより深く理解するための基礎作業でもある。

6年半に及ぶトルコ在住を経験したアメリカの人類学者ピアース（Joe E. Pierce）は“Life in a Turkish Village”（1964年）を著したが、そこでは丹念なフィールドワーキングに基づきつつ、「割礼」「家を建てる」「結婚」「大人になる」「生計」「井戸堀り」「食事の準備」「兵役」「モスクの学校」「トルコ風呂」「犠牲祭」「断食」「生と死」等の村に関する様々

な文化と活動を扱っている。今回は、本著書をベースとしつつアナトリアのデミルジレール村の実態に関するまとめを行った。

2. デミルジレール村

デミルジレールは約50軒から成り、各々に家には、多くの場合、拡大家族（一人の男性とその妻、息子達とその妻、未婚の娘達、息子達の子供）が生活する。村はカマン（Kaman）の町近くにあり、カイセリ（Kayseri）市に向かう首都アンカラから約110km南東の半乾燥高原に位置する。小麦栽培が中心で羊や山羊の放牧も行われている。村には村長（Muhtar）、ホジャ（Hoca、ムスリムの導師）、村の監視人（Bekçi）、畑の監視人がいる。この4者は政府から現金給与を受ける。従来は自給自足の村であったが、カマンとアンカラを結ぶ高速道路が村の裏手に開通し、生産物の市場出荷等の利便性が増大した。このため村は経済的に発展し、1950年当時の僅か15家族が1960年代初期には50家族へと増加した。この急速な増加は、トルコ全体に起こった一般的な人口爆発を象徴している。カマン及びアンカラに向かう高速道路への近接性が村人達の生産物を市場出荷させやすいこと、鋼を曲げた犁の使用が従来の木製犁の場合よりも大きな余剰生産を可能としたことが、村の人口増加を加速化させた。カマンの町に近接するため、大抵のアナトリアの村では利用できない学校と医療施設へ行くこともできた。

3. 社会構造

デミルジレールは同族結婚の村であるが、結婚を規制する原則は「近親結婚」の回避である。村の社会的相互関係を支配する2つの重要

なメカニズムとしてジェンダー分離と年齢秩序がある。村のどの家にも男女別々の居間があり、それは両性別々の機能を持つ。男達は男部屋、女性達は女部屋で別々にくつろぎ、女性が男部屋に入ることは稀である。村では年長者ほど尊敬に値する処遇を受け、「長幼の序」が支配する。村の人々は優れた男達と劣った女性達に区分され、更に、特権と名誉を持つ高齢者、村内の日々の仕事の殆どをこなす大人、何らかの権限も責任も持たない子供の3者に分かれる。

村人全員が農民であり、血縁関係に基づく伝統的社会構造が存続してきた。しかし、人口増加と共に若者の農業以外への就職、村長宅での成人男性全員による集会の物理的困難性等により、従来の社会構造は徐々に崩壊しつつある。

4. 親族名称

一般に話しかけられる場合、特に話しかけられる個人が話し手より年長の場合、人は名前より血縁関係用語で呼ばれる。例えば、仲間の年長男性は血縁関係になくとも親しければルヒ・アーベイ（ルヒ兄さん）等と呼ばれたりする。親族名称で特徴的な点は、叔父・叔母と呼ぶ男性女性に父方と母方で呼称が異なること、従兄弟・従姉妹（いとこ）と呼ぶ人々に対する名称は存在しないことの2点である。即ち、父方の叔父はamca、叔母はhala、母方の叔父はdayı、叔母はteyzeと呼称され、いとこである両親の兄弟姉妹の子供は、例えばマームッドのように、ただその名前で呼ばれる。トルコ語の特徴の一つは親族名称の虚構的用法であり、血縁関係のない他人に対しても親族名称で呼びかけることが多い。家族関係を表す親族名称が豊富であることの背景には、かつての中央アジア時代のトルコ民族が遊牧生活を基礎とする大家族制度であったことが考えられる。

5. ムスリムの生活様式

村の宗教はムスリムである。村人達は聖俗の

区別を行わず、コーラン及びその付属書は彼等の生活様式を支える基本的指針である。ムスリムの大切な五つの教えは、一日5回のお祈り、貧しき者への施し、聖なる“Ramazan”における断食、“Kurban Bayramı”における子羊の犠牲とその肉の貧者への施し、メッカへの巡礼である。村で一番立派な建物のモスクは村人全員からの徴収金で維持される。ホジャは村の精神生活とモスクの運営・財産に責任を持つ。宗教以外の民間信仰も存在し、危険なものに対する青いガラス玉のお守り“The Evil-eye”は村のどの家にも飾られている。

6. 村の教育

村の習慣や活動はフォーマル教育よりも日常の実践を通じて伝達され、子供は親や年長者の働く姿を観察し模倣した。従来は子供が学習するフォーマルな学習の場はモスクの学校であり、そこでコーランを学んだ。少年に関しては、最も重要な半ばフォーマルな学習の場は村長宅の夜の会合だった。村の男全員が参加する会合のやり取りに耳を傾けつつ、少年は村に関する技術や文化を吸収した。伝統的に村はジェンダー分離のムスリム社会であり、少女は母親や女性親族の生活をモデルにしつつ女性の役割を学習した。公教育制度の普及に伴い、近在の町に小学校ができた。有能な卒業生は中学校に進み、その後は更にリセ（高校）に進学する。

7. 今後の研究課題

Carol Delaneyの著書「種と土地」（1991年）を中心に、1980年代のアナトリアの村の典型事例としてのギョクレル（Gökler）村の実態を探ることとしたい。現代のトルコは地方から都市への人口移動の著しい時代であり、トルコ全体が農村社会から都市化社会へと変貌しつつある。トルコの農村と都市の両者を意識しつつ、人々の心の在りようの変化、教育課題、人口問題を解く鍵等について研究を進めていきたい。